



ALM 手法のご紹介 第四回

日本ヒューレット・パッカード株式会社
HP ソフトウェア事業統括 小宮山晃

先日(2011年2月15日)、日本 HP 主催で ALM11 イベントが開催され、HP 社テスト系製品の最新バージョン 11 とソリューションが紹介されました。

そこで、前回の最後に第四回のテーマとして HPQTP や Manual Runner 以外のツール連携することによる効果について説明するといいましたが、その前に、HP がどのように ALM を考えているかについて新バージョンリリースと同時に作成した冊子「アプリケーションハンドブック～最新のアプリケーションライフサイクルを理解するためのガイド」から HP の考える ALM アプローチについてお話しさせていただきたいと思います。

HP の考える ALM アプローチ(コアライフサイクルと完全ライフサイクル)

第一回で ALM とは「全体最適化」を実現していく手法と説明しましたが、その際の視点は ALM の概念について ALM 手法を支援する各ツールベンダーのアプローチに分け入らずにお伝えしたのになります。ここでは、上述の冊子にある HP の考える ALM アプローチについて概要部分を紹介したいと思います。

まず、一般に開発ライフサイクルというと要件フェーズから導入(運用開始)までを考える事が多いと思いますが(システム開発ライフサイクル:SDLC)、第一回の図 1 にもあるように「IT 戦略(PLAN)」、「アプリケーション開発(DELIVERY)」、「運用(RUN)」さらにはそのシステムが「廃棄(RETIRE)」されるまでの広範囲まで含めたライフサイクルを理解する事が重要だと HP の ALM アプローチでは定義しています。この広範囲なライフサイクルを表現するために SDLC とは区別し「完全ライフサイクル」とし(図1)、要件フェーズから導入までの SDLC に相当する部分を完全ライフサイクルの中核という意味で「コアライフサイクル」と HP では表現しています。

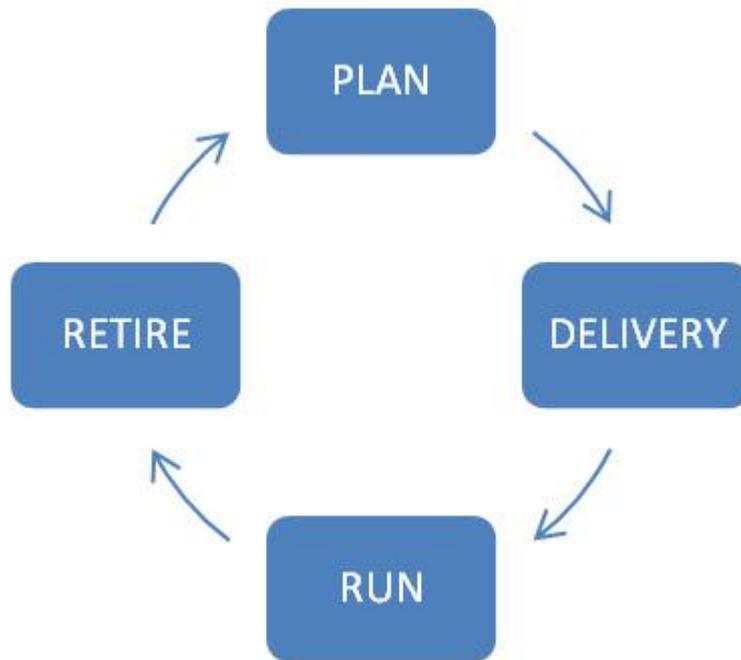


図 1

この完全ライフサイクルを視野にいれて全体最適化を行わないと TCO(総所有コスト)を最適化することができないと HP では考えます。理由は今日のアプリケーション開発の課題を考えるとよく理解していただけるかと思います。

例えば、人的リソースを考えた場合、ビジネス目標が「オフショア、ニアショア化によるコスト削減」、「柔軟な人員確保」、「継続的に生産可能な体制」を実現することだとすると、そのために様々なチームに分散した開発体制になる傾向にあります。ところが、分散化を進めるとチーム毎に別途存在する縦割りプロセスが発生し、同じ認識レベルで情報共有化が困難になります。その結果、チームごとに作成したプログラムなどの管理が複雑になるといった事が IT の課題として副次的に発生してきます。現状は従来の仕組みを継続しスプレッドシートによる情報管理やチーム独自のドキュメントで運用され、それを分散チーム相互でやりとりするためにコミュニケーションのメールやミーティングが必要となりその分の作業増加になりがちです。

人的リソースだけではなく、最新テクノロジーの採用や、アジャイルなどのプロセスへ移行するといった場合もコアライフサイクルだけでなく完全ライフサイクルを視野に入れた全体最適化を行う事が成功へのカギだと HP は考えます。また、そのためにツールが支援するポイントを HP は「自動化と管理機能の統合」と考えています。

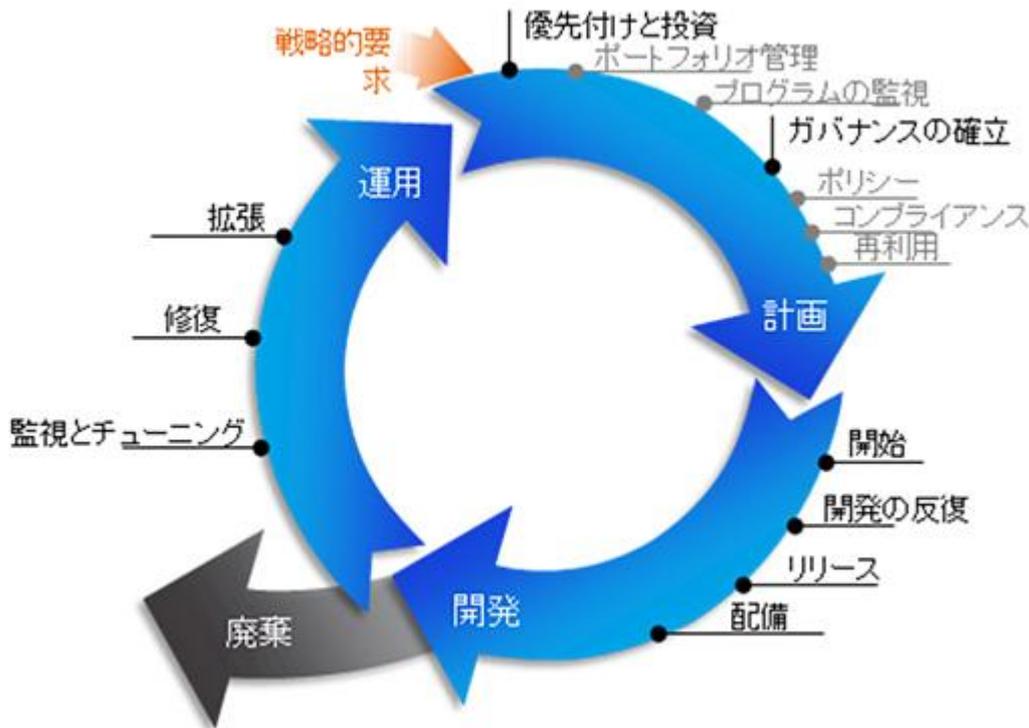


図 2

例えば、図 2 をみていただくと完全ライフサイクル、コアライフサイクルにおいて多くの管理すべき項目があることがわかります。現在、これらの項目はどのように管理しているのでしょうか？品質保証チーム、開発チーム、運用チームで異なるポリシーや KPI を設定していることはないでしょうか。図 2 が示すようにアプリケーションはファーストリリースが行われただけで終わりというわけではありません。社内システムであれば、リリース後も各業務部門のビジネスニーズに応えるために派生開発を繰り返すこととなります。そして、システムが廃棄されるまでの数年間に渡るライフサイクルを管理し続けていく必要があります。それゆえ、この管理をいかに統合していくかが HP の考える ALM アプローチなのです。

HP ツール間連携機能 (Project and Portfolio Management、Service Manager)

完全ライフサイクルを考えるとサイクルの出発点となるのが「IT 戦略 (PLAN)」になります。ユーザーからの要求に対して、全てが要件として採用されるでしょうか？ どのような承認ポリシーで要求が採用されているのか、また毎回同じ承認ポリシーが採用されているのか決まっているでしょうか。企業がアプリケーションシステムに対する要求をすすめるためにはシステム資産をほかの資産を考えるのと同じようにポートフォリオ管理する事が重要です。ポートフォリオ管理のために重要なことは「要求に対する自動化されたワークフローと秩序の導入」です。

HP ではこの要求に対する自動化されたワークフローと秩序の導入を支援するポートフォリオ管理ツールとして HP Project and Portfolio Management (以後 HP PPM) があります。HP PPM では、新たな要求をすべて一元的に集め、承認するまでのプロセスをワークフロー化する事ができます。

一般に要求の採用については社内のポリティカルな関係に影響を受けがちですが、HP PPM を利用することで統一されたポリシーを遵守させ、すべての要求に対する優先度を視覚化する事が可能になります。優先度はいくつかの要素

を組み合わせで行います、内部収益性やビジネス戦略との一致度、生産性などの要素を組み合わせでモデル化します。さらに参考とされる情報として現在稼働しているプロジェクトの状況を収集することが求められる場合に、HPQC と HP PPM を連携させる事ができます(現在連携は英語版でのみ対応)。これにより現プロジェクトの要件、テスト、不具合の傾向分析、テストのステータスが容易に収集でき、現実の評価を見ながら継続的なポートフォリオの最適化を可能にします(図 3)。

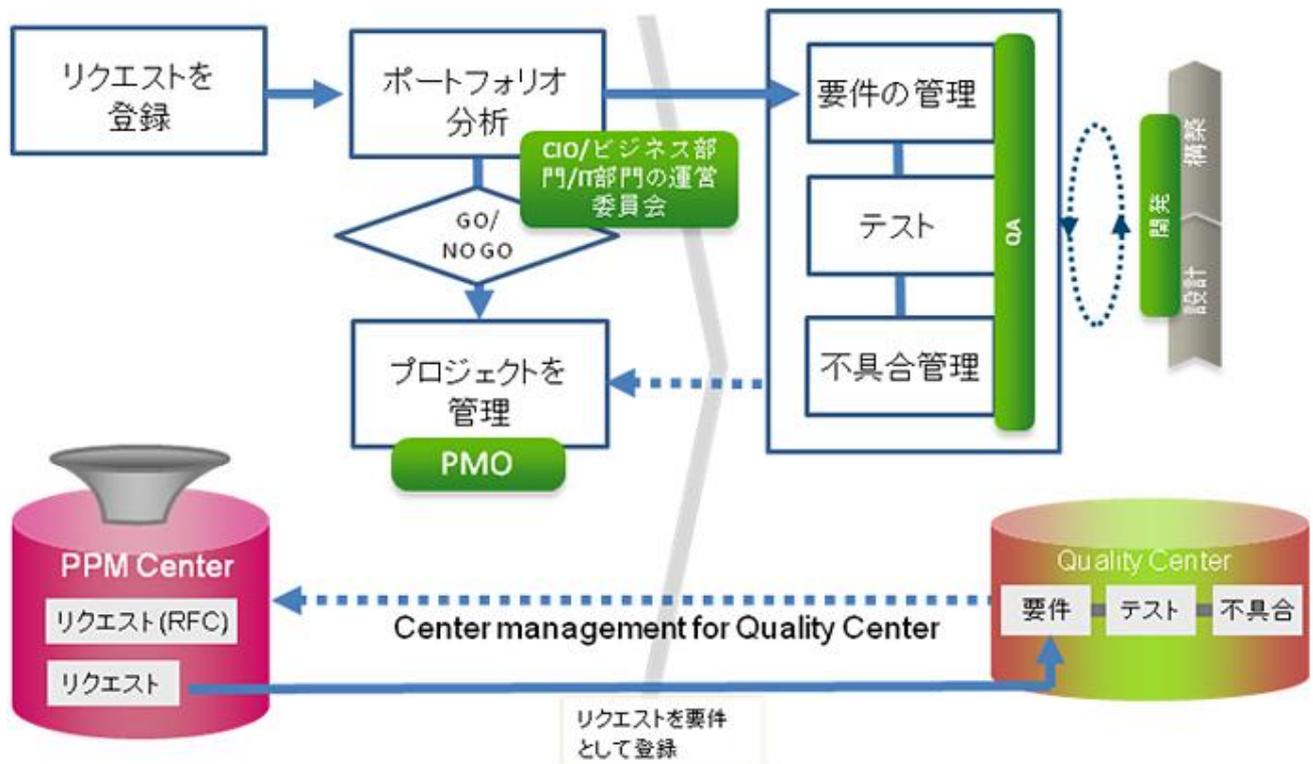


図 3

継続的なポートフォリオの最適化により先に述べたような社内のポリティカルな関係にとらわれることなく客観的な数値化、自動化された要求承認のワークフローを作成することができます。また、HP PPM を利用することで全ての要求は承認までのワークフローを遵守させるだけでなく、履歴を記録しておくことができるためコンプライアンスで利用される監査証跡にも利用することが可能になります。

要求はすべてがユーザー側やビジネス戦略から出てくるとは限りません。運用中に発生する不具合などから発生する変更依頼も重要な要求(変更要求:RFC)です。変更依頼要求も要求承認のポリシーを遵守しなければなりません。要求された変更を追加できるリソースがあるか、より緊急度の高い要求があるのではないかといった事はポートフォリオ管理と変更依頼が統合される事で自動化できます。HP では、運用(RUN)中の変更要求・障害報告を管理するツールとして HP Service Manager があり、ここで新しく RFC として登録されると HP PPM へ新規の要求として承認ワークフローへ自動的に乗せていくことができます(図 4)。また、Service Manager で登録された不具合は HP QC へ取り込むことができ、開発チームで修正時に必要となる不具合発生機能部分へ関連するテスト項目、テスト実施品質のチェックまで自動化する事ができます。

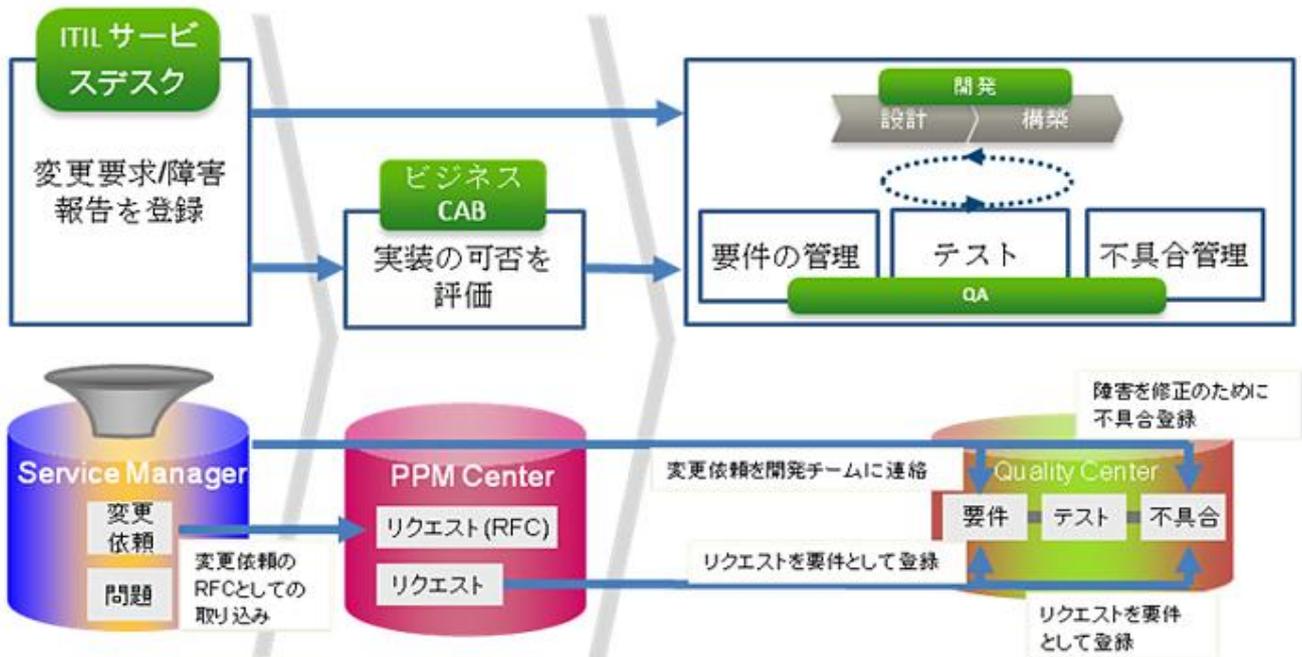


図 4

このように完全ライフサイクルにおいて発生する要求や不具合など品質に関する情報をツール間連携により品質管理のベースとなるテストマネジメントツール HPQC へ取り込み、統合管理する事が可能になります。ご紹介した各ツールについてご興味のある方は詳細な情報が下記 URL にございますので、ご覧ください。

- ・ [HP Project and Portfolio Management Center の紹介](#)
- ・ [HP Service manager のご紹介](#)

まとめ

今回は、HP の考える ALM アプローチ概要についてお話をさせていただき、これまでも重要視されてきた SDLC にあたる「コアライフサイクル」と、コアライフサイクルを中核とした IT 計画から廃棄までの「完全ライフサイクル」について説明しました。TCO や全体最適化の検討を行うにはこの 2 つのサイクル視点でとらえることが重要ということを説明しました。そこで HP ツールが支援するポイントを「自動化と管理機能の統合」としてご説明しました。

そして、完全ライフサイクルの「IT 計画 (PLAN)」、「運用 (RUN)」部分において、第二回で紹介した HP 社のテストマネジメントツールである HPQC との連携効果についても説明しました。ALM 支援製品のプラットフォームとして HP では、HPQC がコアライフサイクルだけでなく、完全ライフサイクルにおいても重要な位置づけを占めていることが分かっていただけたかと思います。

1 回目の HP 主催の ALM11 のイベントは 2 月 15 日に終了しましたが、今後も HP テスト製品関連セミナーなどを開催していきますので、ご興味がある方はこの BTO Club のイベント情報ページをチェックしていただければと思います。

次回も、今回ご紹介したツール以外の HPQC との連携することによる効果を ALM 手法の視点から説明したいと思います。